

「本当の自分」

情報通信工学科二年 天野 未来

いつからだろう。自分の心にブレーキをかけ始めたのは。幼い頃は、楽しければ大きな口を開けて笑い、悲しければ大声を上げて泣き、悔しければ、ジダンダを踏んで全身でその感情を表現したものだ。成長するにつれ、少しずつ自分の感情をコントロールし、抑える術を身につけていった。それは社会という世の中とうまく付き合っていく処方であり、大人になるということなのだろうか。

私はもう随分長い間、「自分らしい生き方」をしていないと感じながら、日々を過ごしてきたように思う。他人の目を気にし、他人と同じであることを「善」とし、仮面を被りながら「本当の自分」をさらけ出すことを拒み続けきた。たくさんの友人に囲まれ、「悩みなんてないでしょう」と言われながら、明るい人を演じ続けてきた。そしてその反面、心のどこかで無理をしている自分にも気付いていた。私はもがいていた。「本当の自分」を直視する勇気と、見失う恐怖の間で・・・。

そんな時、私はドナと出会った。彼女は自閉症患者だった。「自閉症」この病気について正しく理解している人が、どれだけいるだろう。少なくとも私は誤解していた。環境や性格など、後天的要素による精神的病いとばかり思っていた。だが実際は、脳の先天的機能障害による病いだった。その病症については、「身体と精神は健康であるのに、精神を司るメカニズムだけがどこかうまく働かなくなって、自分を表現することはできない」と、ドナは自ら説明している。こうした自閉症の特徴を彼女も確かに示していたが、ことばを理解する能力と深い洞察力において、ずば抜けていた。そして何より、置かれた環境の中で精一杯自分の運命を切り拓いていこうとする不屈の意志が、彼女にはあった。

彼女は闘っていた。どのページの彼女も「本当の自分」を求め、懸命に戦っていた。物心ついた頃から、周りの人から「ばか」「異常」と嘲られ、周囲の世界とも自分自身とも折り合いをつけることができず、自分の殻に閉じこもり、傷つき悩み続けた。彼女は、「世の中」と呼ばれる「外の世界」から自分を守るため、そして逆に、なんとかその「世の中」という世界に加わろうと必死に闘っていた。

ドナは自分を守るために、社交的でにこやかなキャロルと、理屈屋でむっつりとしたウィリーという二人の人物を心の中に創り上げ、状況に応じて使い分けてきた。彼女にとって、ただ一つの「外の世界」とのコミュニケーション手段であり、生き抜いていくための手段でもあった。だがそれは、複雑な現代社会の中で仮面を被りもがいている私と、何ら

変わりはないように思えた。むしろ前向きな生き方において、ドナのほうが真摯だと言えるかもしれない。苦しみながらも自分の生き方を探り続けている彼女の姿に、私は深く共感し、彼女を特別な世界の間人だとは、とても思えなかった。

また、ドナは行動的だった。どんな困難にも自分なりの解決策を見出し、決して諦めず、自分をごまかさず、自分に正直に生きていた。その生き方が、精神科医メアリーとの出会いを導いた。メアリーはドナを患者としてでなく一人の間人として受け入れ、彼女の中の「一生懸命外に出たがっている怯えた小さな女の子」に気付いた唯一の女性だった。この出会いが、彼女の生き方をより積極的に変えた。休学していた高校に復学し、大学へ進み、さらに自分と同じ自閉症に苦しむ子ども達のために教育学を学ぶまでに成長した。それは私にとって驚異だった。彼女を突き動かす力は、どこから生まれてくるのだろう。自閉症のドナの方が私よりずっと豊かにいきいきと今を生きていた。

自閉症であることをはじめ、家族、学校、友達との葛藤など数々の試練を乗り越え「本当の自分」を見出すまでのドナの過酷な心の軌跡をたどることで、私は自分を見つめなおすことができたように思う。弱く脆い私がいた。ドナは「本当の自分」を捜し求め、私は求めながらも避ける生き方を選んできた。だが、「自分らしい生き方」を願うなら、そんな自分を打ち破らなければならないと知った。今の私には、仮面を脱ぎ捨て生きていくだけの強さや潔さはまだないけれど、「本当の自分」と向き合い、対話する勇氣は、確かにドナから与えてもらった気がする。自分の中に存在する「本当の自分」を意識しながら生きていく限り、大切なものを見失うことはないだろう。人が人である以上、その心は意味を求める。悩むことは悪いことではないと気づいた。自分の生き方を真剣に見つめている証なのだ。

ドナの「世の中」に対する長い長い闘いが終わり、彼女が本当の自分自身でいられる自由な開放感に浸った時、私もまた、心に重くのしかかっていたものが、徐々に取り除かれ癒されていく自分を感じていた。

書名 自閉症だった私へ 著者名 ドナ・ウィリアムズ 出版社 新潮社